広島大学大学院教育学研究科紀要　第一部　第58号　2009　135－142

台湾の教員養成教育における文学教育の考察

― 指導案の考察を通して ―

余　亮　閭

（2009年10月６日受理）

A Study of Taiwan's Literature Education in a Teacher Education Course
― Focus on lesson plans ―

Yu Liangyin

Abstract: The purpose of this study is to realize the inclination of literature education in Taiwan's teacher education course. Two textbooks which used in Taiwan's teacher education course were identified in this study, especially focus on the authors' concepts and the lesson plans. The prior researches are presented the intervention of National ideology in Taiwan's primary school textbooks. The sovereignty of Taiwan changed from Japan to the Nationalist Government in 1945, and the Japanese education also became to Chinese education. From course standards (1952～1998) in Taiwan, the Chinese culture, patriotism, moral etc. which could be considered as spiritual education, are emphasized in content. Nowadays, the literature education how reflects the effects of National educational policy, is also the research point in this study. The conclusions in the study were as follows: ability of language is focused on, the particularity of "Affection", the ignorance of literature material.

Key words: Taiwan, literature education, lesson plans
キーワード：台湾，文学教育，指導案

１．はじめに

台湾では，1975年「国民小学課程標準」公布以来，18年ぶりの修訂が行われ，1993年に改めて「国民小学課程標準」を公布して，1996年に実施し始めた。また，1998年「国民教育九年一貫総綱」が公布され，2001年から随時に「小中学校九年一貫課程綱要」が実施されてきた。新教育（課程綱要）の実施に伴い，課程の旧教育観が全て排除されたわけではない。旧教育（課程標準）と新教育（課程綱要）の境目に立っている台湾の教育は，新教育観による新しい方向に推し進める力と旧教育観による旧来のあり方に戻す力とのはざまで揺れ動いているのが，現在の実情である。

本論文は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として，以下の審査委員により審査を受けた。
審査委員：難波博孝（主任指導委員），植田敦三，山元隆春

２．問題意識

1987年，台湾人の意識を40年近く縛ってきた戒厳期が終わり，全島が民主化の一歩を歩みはじめた。その後，批判的な視点で各分野の研究を進める気運も出てきた。台湾戦後教育に関する研究も，本格的な研究が始まったのはそれほど古いことではない。台湾戦後教育に関する研究内容には，次のような傾向があると山崎（2009）は整理している。①戦後初期台湾教育の「党化教育傾向」 ②イデオロギーの覇権及び知識・権力などの問題　③国家の政治・経済発展の目標との統合

という問題　などである。山崎の指摘するこれらの傾向から考えると，戦後初期から80年代後半にかけて，台湾戦後教育には，学校教育への「イデオロギーの参与」という課題があったことがわかる。

その一方で，論者が修士課程時に行った，小学校国語教科書に対する二回の調査の結果[1]により，文学教材の「量」（一つ教材の長さ及び教材数）が増加する傾向にあるという結果を得たが,「内容面」からみると，児童に伝えたい「価値内容」が「明確的に」書かれる現象が二回の調査を通して，ほぼ同様に見られた。前者は，道徳心の養成が中心になっており，後者は,「主体的に読むという姿勢を弱めてしまいかねない[2]」のような児童の思考過程を重視していない傾向があった。

台湾の小学校国語教科書におけるイデオロギー[3]の介在については，台湾の児童文学者であり，教科書の編集者でもある林良が次のように述べている。

「国語教科書の創作と一般の創作は全く違います（略ー余）例えば，子供が父親の実家に行き，夏の夜を部屋で一人で過ごす，という内容を書くとき，暗くて怖い，という感情を描写すると子供が夜の闇を怖がるようになるから書いてはいけない，というもありました。暗いから怖いというのは自然の感情なのに人格養成という観点など沢山の観点からの要求です[4]。」

ほかに，趙天儀（1998）は「現在，小学校の教科書に，政策に絡んでいるイデオロギーのある教材がまだたくさん載せられている。このような教材から，児童が正しい知識を得ることはできないといえる」と指摘している。この二人の論述は1998年になされたものだが，論者の教科書調査を通して，二人が指摘している教科書の課題がまだ残されていると考えている。

漢字社会である台湾の国語教材の編成については，まず，児童に学ばせたい文字，熟語などの言語技能及び価値内容をベースにして，出版社側の「教材作成グループ」の手で,物語のような内容（文学教材の場合）を作成するのである。従って，台湾の国語教科書に載せられている教材のほとんどは，作者名が明記されていない（2006年調査時点）。このような教材編成は，台湾における学習，生活などに欠かせない膨大な漢字量とかかわっていると考えられる。このように教材作成が漢字学習に左右されることについて，林良は次のように述べている。

「現在の国語教科書は作家の作品なども全くの文章の執筆者によって書き換えられます。書き換える原因はいろいろあります。小学校にはどのように子供を教育するか，どのような国民に育てるか，という学習目標があるのでそれに合わせて書き換えたり，新出漢字が多すぎるときに子供達が習ったことがある字に変えたり，反対に新出漢字が少ないと習っていない語彙を増やしたりしてバランスを取ります[5]。」

本論の研究方法は，台湾の教員養成コースが設置している大学で，頻繁に使われる二冊の教科書を取り上げて考察を行う。日本の状況と同じように，教員はほとんど教員養成コースから出るので，教員養成コースの教科書及び教え方などが，これから教員になる学生に大きな影響を与えると考えられる。もちろん，二冊の教科書の考察だけで，台湾の教員養成教育における文学教育の全てについて言及するのは，無理なところもあるが，台湾文学教育の特徴及び方向を概観的に表すことができると考えている。

3．これまでの台湾の指導要領の変遷

大学の教科書を取り上げる前に，その前提となる台湾の学習指導要領の変遷について，概略的に説明する。国民党政府来台（1949年）後，指導要領の公布については，次のようになっている。

1952年「国民学校国語，社会二科修訂標準」
1962年「国民学校修訂課程標準」
1968年「国民小学暫行課程標準」
1975年「国民小学課程標準」
1993年「国民小学課程標準」
2000年「国民中小学九年一貫課程暫行綱要」
2003年「国民中小学九年一貫課程綱要」

本稿では，特に1993年の「国民小学課程標準」と1998年の「国民中小学九年一貫課程暫行綱要」に注目する。1975年に改訂された「国民小学課程標準」（以下は「課程標準」に略す）が，1993年に修正，公布され,1996年に実行される。課程標準の「目標」には,「小学校教育は生活教育及び品格教育を中心とする」ことが明示されている。それと関わって,「健全な国民を養成する」ため,次のような七つの目標が掲載される。

①勤労実直，責任，法的な観念，品格を持たせ，愛家・愛郷・愛国・愛世界の情操を養う，②自己理解，環境認識及び社会適応などの基本能力を育成する，③よい生活習慣を身につけ，健やかな体の育成，休暇の活用によって，心身健康に促進する，④協力の精神を養い，人間関係を促進し，社会参与への関心を励む，⑤美的観念，創造能力を育成し，生活趣味を高める，⑥積極的な学習，思考，創造，問題解

決能力を育成する，⑦価値判断の能力を養成し，積極的な精神を身につける。

第二次世界大戦後，国民党政府統治期を経て，民主化に変容してきた今日の台湾では，小学校教育における，三民主義思想と儒教思想とを混和した「道徳性の高い」教育内容（品格教育）は国民教育の「柱」のような存在といえる。1993年の課程標準の「目標」に，「生活教育及び品格教育を中心とする」ことが明示されていることから，従来の課程標準の中心思想が大きな変化はないといえる。しかしながら，これまでの課程標準に強調されてきた「徳，智，体，群」四つの価値内容から，「徳，智，体，群，美」五つに変更された。

「国語の目標」については，次のようになっている。

①倫理概念，民主修養，科学精神を養うこと。愛国思想を励まし，中華文化を広げること。②生活経験を広げ，思想情意を陶冶すること。想像力，思考力，積極的な精神を培うこと。③国語の特質を認識し，国語を愛する気持ちを培い，自分が発表した内容に責任を持つこと。④標準国語で思想情意を充分に表す能力。⑤常用漢字を身につけ，本や新聞雑誌を読むことができ，文学の鑑賞興味及び能力を養い，図書館を活用することによって，学習に役立つこと。⑥口語文で思想情意を表す能力及び作文能力・興味を養うこと。⑦正しい書き方及びよい書写習慣を身につけ，碑帖を鑑賞することができること。

①は，従来強調されてきた思想である。②は，児童の生活経験，思考力，想像力に着目するものであり，その源は，60年代の課程標準に遡ることができる（従来は「創造力」と書く）。④～⑦は，言語技能面に着目する記述である。

【読むこと】の段階目標から見ると，低中高ともに，文体の認識，文字の形・音・義が強調されていることがわかる。言語学習の補助手段として，字典，辞書などの認識（低学年）から，字典，辞書などの使用（中学年），そして図書館の運用（高学年）という流れになっている。読書に関する記述については，注音で書いた課外読物の読み（低学年）から，課外読物の読みや鑑賞及び趣味（中学年），そして読書，鑑賞，自主学習に対する興味，能力（高学年）が要求されている。

現行の「国民中小学九年一貫綱要」（以下は「課程綱要」と略す）は2000年に公布され，2001年から随時的に実施されてきた。

台湾における今回の全般的な教育改革の特徴として，一つ目は「領域制」を取り上げることができる。これは，従来の学科を，七つの学習領域に統合したものである。今回の改革は，学科の制限を打破し，各領域の連携に着目するといえる。この七つの学習領域とは，「語文」，「社会」，「数学」，「自然と生活に関する科学技術」（自然與生活科技），「健康と体育」，「芸術と人文」，「総合活動」である。また，「語文」領域には，「本国語文」（国語），英語及び「郷土言語」（閩南語，客家語，先住民言語）がある。二つ目の特徴は，「十大基本能力」の設定である。十大基本能力は，七つの学習領域に共通しており，「課程目標」としておろす際，領域によって調整するのである。三つ目は，「郷土言語」の位置づけである。従来，台湾の各郷土言語は学校教育から排除されたり，その位置づけが曖昧であったりしてきた。「郷土言語」が「本国語文」に設置されることは，台湾社会の本土意識（文化，言語など）の高揚に応じた政策ともいえる。四つ目の特徴は，「九年一貫」のカリキュラムの構成である。1968年から，台湾は九年義務教育を実施し始めたといえるのだが，小学校段階の課程と中学校段階の課程とがうまく繋がっていないといえる。この連続性の問題を解決するため，今回の改革では，九年一貫のカリキュラムの構成に力を入れている。

「課程綱要の基本理念」から見ると，「課程標準」で掲載された道徳心の養成が強く感じられる用語（品格教育，徳，智，体，群，美，勤労，実直）が少なくなっているといえる。また，「課程標準」での「協力の精神を養い，人間関係を促進する」は「他者・他文化の尊重及び賞賛，コミュニケーション」などの用語に変更され，「統合能力，自己表出，自立的な思考，生涯学習」，「民主素養，人文涵養」が新しく加えられたことがわかる。

「国語の基本理念」には，「国語を正確に理解し，活用できる能力を育成することを目標としている」ことが掲げられている。ここでは，「課程綱要」における「生きる力」の育成が特に強調されているといえる。「課程標準」が言語技術面を強調するのに対して，「課程綱要」では，「多元的な視野，国際思潮に対応できる能力，情報科学の活用」が新しく提示されていることから，従来の言語能力の狭い枠を打破し，全般的な能力，生きる力を求めるようになったといえるだろう。

しかし，「課程綱要」の実施はあくまでも最近の新しい出来事である。2000年公布され，2001年から随時に実施されている「九年一貫課程暫行綱要」，2003年の「九年一貫課程綱要」，また，2008年の「九年一貫課程綱要」（2011年実施予定）からみると，台湾の中央政府も一つの新しい方向を模索しているといえるだろう。こうした最新の課程綱要を考察する必要性はもちろんあるが，台湾の教育領域では未だ「課程標準」

の影響も強いと考えられ，その考察はなお依然として不可欠であると考えている。このことを踏まえて，二つの大学教科書を分析したい。

4．分析対象の選定

本稿では，羅秋昭の『國小語文科教材教法』，と陳弘昌の『國小語文科教學研究』を考察対象にした。その理由については，次のとおりである。一つ目は，台湾台北にある，教育大学のテキストの専売店－「師大書苑」に置かれている同類型（初等教育また言語領域）の著作の中で，発行量が一番多いからである（2008年３月の時点で）。二つ目は，インターネット上に掲載された各大学のシラバスをみると，羅氏及び陳氏の著作は少なくない大学[6]で教科書として，採用されることがわかったからである。従って，二人の著書を手がかりにして，台湾における今までの教員養成の国語教育観（おそらく今も続いている）の傾向，特徴などを把握することができると考えている。また，二人の著作から，記叙文[7]の指導案に絞って，台湾の「課程標準」と「課程綱要」の内容を参考にしながら考察する。

羅秋昭『國小語文科教材教法』の目次は次のようになっている。

第一章　小学校国語科課程標準と語文[8]指導の役割
第二章　中国語文の特徴及び混和指導法
第三章　注音[9]の指導
第四章　話すことの指導（聴くことも含められる）
第五章　読み書きの指導（漢字の特徴の説明から，漢字指導までが含められる）
第六章　教材探究（一）内容探究の指導（教材内容面の指導に関する）
第七章　教材探究（二）構成探究の指導（教材構成面の指導－文体，構成，文型，修辞，文法など）
第八章　課外読書の指導（各文体の読み方，指導方法，読書レポートの作成など）
第九章　作文指導（指導法，句読点の指導，評価など）
第十章　書写指導（硬筆指導，毛筆指導）
＊第十一章　指導案の書き方[10]
第十二章　宿題指導と教学方法

陳弘昌『國小語文科教學研究』の目次は次のようになっている。

第一章　総論（国語指導に関する概論）
第二章　心理学の角度から見る小学校語文教学（話すこと，読むこと，作文，書写に分けて述べる）
＊第三章　国語科混和指導法の研究[11]
第四章　注音指導
第五章　話すことの指導
第六章　読むことの指導（「読むこと」，「課外読書」，句読点などの指導要点が含められる）
第七章　作文指導
第八章　書写指導

4．台湾の教員養成教育における文学教育の考察

4.1　羅秋昭

以下は，羅氏の著書で例として取り上げた指導案の概要である。教材は国立編訳館1995年出版の二年（上）に収められたものである。

学習単元：『ライオンとネズミ（イソップ寓話）』（二上）

【指導案】

ア）指導計画：全６次（一次40分）

第一次　絵を見ながら物語を話す
第二次　粗筋を述べ，新字・単語を学習する
第三次　文章を朗読したり，内容を学習する
第四次　形式の探究
第五次　絵を見ながら作文する
第六次　全体をまとめる

イ）教材について

①本教材は童話であり，ネズミの恩返しとかかわる物語である。この物語を通して，寛容の重要性を説明する。
②本教材は主に叙事であり，事実を利用して，ライオンとネズミという２種類の性格を相対化する。
③本教材の内容は一般的な物語の述べ方であり，出来事の原因を先に説明して，次は経過，最後は結果を述べる。
④関連学習については，音楽学習と関連させ，ネズミとライオンと関係ある歌を歌う。理科学習と関連させ，ネズミとライオンの生態を理解する。

次は，羅氏の指導案に基づいて，「学習目標」，「教学活動」，「評価の観点」を取り上げて，以下のように整理する。

学習目標	教学活動	評価の観点
（第一次） 絵を見ながら物語を話させる。	用意したネズミとライオンの絵を見ながら，登場人物の特徴を認識させる。 教材内容と同じ順序の絵を見ながら，教員の質問に答えながら，物語の内容を理解する。	ヒントによりながら，各絵の内容を話す。 論理性，順序を配慮しながら，物語の内容を話す。 スムーズに，アクセントに配慮しながら内容を話すことができる。

（第二次） 本文を読んで，粗筋を述べさせる。 教材内の新字，単語を理解させる。	教師からの質問に答えながら，物語の粗筋を考えさせる。 教員から粗筋を教えてもらう。 新字・単語の学習（部首，筆画，筆順など）。 習作を書く。	正確に，速度に配慮しながら読むことができる。 内容の粗筋を話すことができる。 正確的に新字，単語を読むことができる。 新字，単語の意味，注音を話すことができる。
（第三次） 文章を朗読して，内容を理解させる。	正確に文章を朗読する。 文章の読解：教員から文章内容を解釈しながら，新字・単語を復習する。 内容探究：質問を答えさせたり，感想を述べさせたりする。	正確な筆順で新字を書くことができる。 正確なアクセントで朗読できる。 正確に答えを出すことができる。
（第四次） 文章の文体及び構成を理解させる。 字形を認識・練習させる。 本教材の重要な文型を応用させる。	形式探究①：文体，粗筋，構成を学習させる。 形式探究②：「獅，師」；「爪，瓜」；「由，油」などの違いを理解させる。 「獅大王，您別怕，我來救您了」を他の文で話す。 「看見……就，一下子就，一定會」という文型を用いて文づくりさせる。	本教材の文体を話すことができる。 正確的に各段落の概要を話すことができる。 正確に文字の違いが分かる。 文づくりができる。 正確に他の文で話すことができる。
（第五次） 絵に基づいて短い文章を書かせる。	『都会ネズミと田舎ネズミ』の絵を見ながら，教員の質問に答える。 作文の書き方を学ばせる。	絵に集中しながら，正確に絵の意味を話すことができる。 筋道，順序に注意しながら，内容を話すことができる。 正確かつ論理性のある内容を書き，また，互いの作品を評価することができる。
（第六次） 寛容の大切さを理解させる。	全文をまとめる。 朗読する。 他人を許してあげた経験や他人が許してくれた経験をあげて，交流する。 他人を許すことのメリットを話す。	教師の質問を正確に答えることができる。 正確に他人を許してあげることのメリットを話すことができる。 許すことと恩返しを実生活で運用することができる。 正確に習作を書くことができる。単元テストをする。

（羅氏の指導案に基づいて作成した）

4.2　陳弘昌

陳氏は「混合教学法」に基づいて，現代詩である『歳暮』の指導案を次のように設計する。

教材：『歳暮』（五上）

【指導案】

ア）指導計画：全６次（一次40分）

第一次　教材内容の粗筋，新字・単語を学習する

第二次　内容をまとめて，理解する

第三次　内容の特徴を鑑賞したり，文型を学習する

第四次　朗読・話す指導

第五次　現代詩という文体で創作する

第六次　毛筆指導，予習

イ）教材について

教材に関しては，陳氏は①読書教材，②話す教材，③作文教材，④書く教材　にわけて各要点を分析する。ここでは，陳氏は「読書教材」指導の要点を次のように取り上げる。読書材料として，本教材は「文体，趣旨，大要（文章全体及び各段落），文章の綱要，本教材に出てくる新字・単語，教材の特徴（文体について，構成について，先頭・終わりの書き方について，描写用語について，朗読について）」を要点として指導を行う。

次は，陳氏の指導案に基づいて，「学習目標」，「教学活動」，「評価の観点」を取り上げて，以下のように整理する。

学習目標	教学活動	評価の観点
（第一次） 児童を本単元の予習や関連ある資料の収集を提示する。 本教材を読んだり，粗筋を話させる。 本教材の新字・単語を認識・運用させる。	導入：教員が教材内容に関する写真，児童詩などを教室に貼る。 児童に教材を黙読させる。 教員のヒントによって，答えさせる。 新字・単語の学習（形・音・義，文づくり，筆順が含まれる） 児童に粗筋を書かせる。	読書に興味を持ち，感想などを報告することができる。 黙読ができる。 優等生が述べることができる。中等生が模倣しながら述べることができる。 正確に本教材の粗筋を話すことができる。 児童の参与。 正確に粗筋，新字，単語を書いたり，話したりすることができる。
（第二次） 教材内容をまとめて，内容を理解させる。	児童に教材を朗読させる。 内容探究：質問を与えながら，教材内容を理解させる。 形式探究：文体，粗筋，綱要を理解する。 習作の訂正。	スムーズに読める。 正確に趣旨，粗筋，綱要を話すことができる。 正確に習作を書くことができる。
（第三次） 本教材の特色を鑑賞するこ	文章の鑑賞：文体特徴，構成，語句などを鑑賞させる。	新体詩と旧体詩の差異を理解することができる。

とができる。 本教材の重要な文型で練習する。	文づくりする。 修辞の運用。	起・承・転・合の差異を比較することができる。 修辞を理解することができる。 文章の特徴を理解し，応用することができる。 発表，討論することができる。 正しい答えを書くことができる。
（第四次） 朗読と話すことを指導する。	話すことの指導：美読，自分の冬の経験について話す。	スムーズまたアクセントを注意しながら朗読することができる。 自分の経験について，論理性を注意しながら報告することができる。
（第五次） 新体詩（現代詩）を創作させる。	話す内容を作文の内容として書く。 教材の修辞を模倣しながら冬の形式を書く。 互いに文章を訂正，鑑賞する。	粗筋を書くことができる。 互いの文章の良いところを理解することができる。
（第六次） 毛筆で整っている楷書を書かせる。 本単元をまとめて，次の単元を予習させる。	毛筆の書き方を学習させる。 教材を朗読する。 習作を書かせる。	正確な書き方がわかる。 文字の形に着目することができる。 自ら習作の間違ったところを訂正することができる。 予習することができる。

4.3　考察

4.3.1　二人の語文教育観

【羅秋昭】

著作の第一章「小学校国語科課程標準と語文指導の役割」に，民国41年（1952）の「国民小学課程標準」の「国語科教学目標」に，「道徳観念を養い，愛国思想を啓発し，民族精神を発揚すること」が増加されることに対して，羅氏は，語文教育の「認知」，「技能」のほか，「情意」を配慮した上での結果であると認識する。羅氏にとって，語文教学の役割について，ア）字詞の認知及び運用[12]　イ）詞語の加工（ママ）法則（運用法則）[13]　ウ）思惟操作の能力[14]　エ）学習方法の指導[15]　があると列挙する。また，国語の授業で，「内容探究」及び「形式探究」ともに重要な課題であると羅氏は考えている。前者は，文章内容の認識，趣旨の把握，文章から伝いたい精神・観念，文章によって，論理性及び審美観[16]の訓練などが含まれているという。後者は，文章の構成という。中には，「教材文体の探究」，「文章構成の探究」，「文型，文法，修辞の探究」，「文字，単語の意味の探究」があると羅氏は考えている。

羅氏自身の語文教育論には，文字，詞，句の運用や文法などへの着目がある。しかし，国語教育の一環である文学教育も，言語技能だけの勉強になってしまう可能性があるのではないか。そもそも，この著作では，文学作品と読者（学習者）との関係について触れていないのである。

【陳弘昌】

国語科の重要性については，ア）学習の基礎を築く　イ）児童の思考を啓発する　ウ）児童の徳性を養う[17]　エ）児童生活を充実する[18]　オ）社会発展を促進する[19]　カ）国家の団結を固める[20]　と陳氏が考えている。実は，陳氏の発想と1993年の課程標準と深く関わっていると考えられる。なぜかというと，当時の国語の総目標の中に，倫理観念，愛国思想，中華文化の発揚などが明記されているからだ。第六章の「読むことの指導」には，読書能力の養成については，ア）文章の意味及び作成を理解する　イ）良い読書習慣を養成する　ウ）読書能力を向上する　と陳氏は述べている。ほかには，日本の文学教育に似ている部分も論及されており，例えば，登場人物の感情，立場，情景などの認識，読者が感じたものの整理などがある。しかし，指導方法には，「精読」が強調され，具体的には，文体，主旨，大意，新字・新詞，読み方（朗読，黙読，速読など），文章の探究（内容探究と形式探究にわかれ），特色の鑑賞，辞典などの書物の運用があると陳氏が考えている。そこには，前述の登場人物の感情などの認識と関わっているのは，文章の探究の内容探究しかない。陳氏の著作の第二章の「心理学の角度から見る小学校語文教学」の中に，字詞の学習については，文章から学ぶと，効果があるとゲシュタルト心理学者が考えている。従って，台湾の読むことの指導も識字指導を始めとして，書写，説話，作文などと連携して，混合指導を行っていると陳氏が指摘している。その視点に立てば，陳氏が提出した精読の方法は，実は，国語全領域（読むこと，識字指導，書写，説話，作文など）の指導法とも言える。

羅氏と陳氏の論を踏まえながら，二人が提出した「文学教材」の指導案を考えると，「精読主義[21]」が見られ，また，台湾の教育に今でも影響が強い「課程標準」に明記していた道徳心の養成が見られる。

4.3.2　二人の文学教材指導案

今回の両者の指導案の考察を通して，次のよう特徴があると指摘できた。

【言語技能の着目】

台湾という「全漢字社会」を配慮したうえで，言語

技能の定着が低中高学年にわたって，要求されていることは，今回の考察を通して，明らかになっている。ここでいう言語技能とは，文字（注音，部首，筆順，筆画），単語，慣用句，文型，描写，文体，段落の構成などが含まれている。このような指導は,「文学教材」にも見られると今回の考察を通してわかった。

【「情意」の認知】

日本と台湾ともに，授業内容の「認知」,「技能」,「情意」が強調されている。しかし，国によって，この三つの指導内容も違うと今回の考察を通して，強く感じられたところである。羅氏と陳氏の指導案を通して，二人ともに,「認知」,「技能」に関しては，文章構成及び言語学習に,「情意」に関しては，一致性のある，あるいは上から児童に注ぐ価値観に着目するといえる。それは，前述のように，羅氏は愛国心，民族精神などの養成を「情意」と解釈するのに対して，陳氏は「道徳の養成」と解釈することと一致する。

また,「教学活動」から見ると，児童の自ら考える場が確保されていないと指摘できる。つまり，児童の主体性が看過されるおそれがあると指摘できる。

【文学教材の特性の看過】

日本の文学教育では，文学教材の特性を生かす実践が明らかに見られる。例えば,「登場人物の気持ち，性格」,「場面，情景」の着目から，自己変革，世界認識へという指導過程である。文学教材には，自己変革の「種」があるとよく考えられる。また，教員の指導や，互いの交流によって，自分の考え方などを変容させたり，確定させたり（再構成）することを通して，読みの深化と自己理解・確立の深化ともに進む，という「文学体験」もよく取り上げられる。しかし，両氏の著作には，そのような実践課程は書かれていない。文学教育には,読者の「読みの技能」と「自由な読み」ともに含まれている。この両者が「共生の関係」となって，文学の授業で生かすことは重要であり，教員が自覚しなければならないことといえる。

5．今後の課題

今回，台湾の教員養成コースで使用頻度の高い教科書を取り上げて考察を行った。両者の指導案を通して，言語技能面の着目，「情意」の認知，文学教材の特性の看過などの特徴があると指摘してきた。その一方で，問題意識で述べたように，二冊の教科書だけで，台湾の文学教育を考察するのは，無理なところがある。台湾の文学教育をもっと把握できるように，これからは台湾の指導要領，指導案，教科書，現職教育などを考察する予定である。

【注】

1）修士課程時，台湾の小学校国語教科書に載せられている「文学教材（記叙文かつ虚構性のある）」を分析対象として調査を行う。第一回の分析は，台湾台北国立編訳館の教科書資料室に置かれてある教科書により，1996年（1996年以降，民間の出版社が教科書の発行ができるようになる）に出版された小学校国語科教科書（国立編訳館出版した最後の国定版，民間出版社である明倫，翰林，牛頓，南一，康軒）を対象とする。第二回の分析は，台湾台北国立編訳館の教科書資料室に置かれてある教科書により，調査の時点（2006年８月11日，９月22日）に，小学校国語科教科書の最新版（民間出版社である仁林，翰林，南一，康軒）を対象とする。

2）森田信義・山元隆春・山元悦子・千々岩弘一（2002）『新・国語科教育学の基礎』渓水社，p.60

3）台湾では,「記叙文」という日本の文学教材に似ているジャンルから見ると，教材には,「価値概念」（特に道徳の養成）に関する描写は，明白に描いていることを指す。

4）上村ゆう美（2000）「台湾の国語教科書：執筆者の観点」『東アジア地域研究』（インタビューの時間は1998年の夏である）pp.47-56

5）上村ゆう美（2000），同４。

6）羅氏の著作は，東呉，中原，清華，南華，台南，嘉義，東華，花蓮教育，屏東教育，台北教育などの大学で教育学部関係の所属で使われている（2003年から2008年の間）。陳氏の著作は，南華，東呉，中原，台南，嘉義，花蓮教育，屏東教育，台北教育などの大学で教育学部関係の所属で使われている（2002年から2007年の間）。

7）台湾では,「文学教材」の存在は曖昧である。日本の国語科教科書の読むことの教材が,「文学教材」と「説明文教材」と大きく２種類しかないのに対し，台湾では,「記叙文」,「説明文」,「議論文」,「応用文」,「韻文」などのジャンルがある。本論では,「記叙文」のうち，フィクションであるものを「文学教材（文学教育）」としている。

8）台湾の「語文」は，日本の「言語」といえ，ここでは，国語（科）を指す。

9）注音は漢字発音の補助記号である。台湾の国語教育では，一年生の「全注音学習」から６年生の「全漢字学習」に，という流れになっている。

10）羅氏の著作における,「第十一章　指導案の書き方」には，自身で書いた指導案は二つしか掲載されていない。この二つの教材とは，低学年の教材であ

る『ねずみとライオン』（イソップ寓話），高学年の教材である『歳暮』である。今回は，『ねずみとライオン』の指導案を取り上げて考察を行う。

11）陳氏の著作における，陳氏自身で書いた指導案の例については，高学年の教材である『歳暮』（現代詩），注音学習の指導案，話すことの指導案，計三つの指導案がある。今回は，『歳暮』の指導案を取り上げて考察する。現代詩といえながら，人間性を高めるという文学教育の視点から考えると，今回は『歳暮』という教材を取り上げて考察を行う。

12）羅氏の説明により，この部分は文字の形・音・義の運用を指す。

13）羅氏の説明により，この部分は文字から，詞，句への過程を指す。

14）羅氏の説明により，この部分は「何を話す」また「何を書く」という思考の養成を指す。

15）羅氏の説明により，語文知識はもちろん，記憶の方法，説話の芸術，読書の速度，作文の技巧，鑑賞の能力，辞典などの使用を含める。

16）羅氏の審美については，「鑑賞的読み」で，次のように述べている「鑑賞的読みを通して，審美能力を養う事ができ，（中略－余）（書物というと）『故宮の宝物』，『ピカソの絵』，『中国の書芸』，『大自然に歩こう』など」。

17）陳氏が1993年公布した課程標準の国語の目標「倫理観念，民主規範，科学精神を養い，愛国思想を啓発し，中華文化を発揚すること」を，国語科の「道徳養成」の役割であると解釈すること。

18）陳氏の説明により，ここでは人間関係，日常生活，思考面などを指す。

19）陳氏の説明により，良い学習を通して，健全な児童を養成することができる。従って，人類の福祉に貢献でき，社会全体の利益が増進できるようになる。

20）陳氏の説明により，語文教育を通して，人間が交流でき，国の団結も促進することができる。また，語文教育の向上とともに，民族概念，愛国精神，国の富強などを増進することもできる。

21）ここでいう精読とは，前述のように，読み書き，文法，構成に着目する読むこと。

【参考文献】

上村ゆう美(2000)「台湾の国語教科書：執筆者の観点」『東アジア地域研究』

難波博孝・三原市立三原小学校（2007）『文学体験と対話による国語科授業づくり』明治図書

森田信義・山元隆春・山元悦子・千々岩弘一（2002）『新・国語科教育学の基礎』渓水社

山崎直也（2009）『戦後台湾教育とナショナル・アイデンティティ』東信堂

呉清山（2004二版）『初等教育』（1997年初版）五南図書

呉清山（2008）『解読台湾教育改革』心理出版社

陳弘昌（2004二版）『國小語文科教學研究』（1991年初版）五南図書

黄光雄（2004）『教育概論』（1990初版）師大書苑

趙天儀（1998）『児童文学与美感教育』富春文化

歐用生（1993）『教科書之旅』中華民国教材研究発展学会出版

羅秋昭（2007三版）『國小語文科教材教法』（1996年初版）五南図書